

# 古来より、求め続ける不老長寿 君藻とその人参

**中** 国で仙人に憧れた人たちの逸話を集めた「道教百話」にこんな話がある。不老不死を得るためににはこれを食さなければいけないと仙人に言われ、いきなり目の前に赤ん坊の煮物を出された男がビックリして、とても食べられないと断ったところ、よくよく見ればそれは人間の形をした人参であったという。

また、わが国に伝わる数多い国民伝承の中に八百比丘尼<sup>はっぴゃくびくに</sup>の伝説がある。これは、幼いときに偶然のことから靈肉を食して不老不死の身となって八百歳まで生きた女が多く夫との生活を繰り返した後に出来し、比丘尼となって諸国を遍歴したという話である。靈肉は人魚の肉であったと伝えられるが、これが本当に人魚の肉であったか、人間の肉であったか、人参であったのか、いまとなっては確かめるすべもない。

**話** は変わるが、13世紀にイタリアの港町ヴェネチアから旅を続けて中国にまで至り、フビライ汗に仕えたマルコ・ポーロは帰国後に『東方見聞録』を書いた。そこには、ヨーロッパからの旅人として初めて触れた東方(オリエント)での見聞がふんだんに盛り込まれている。なかには荒唐無稽とも思われる奇妙な事物、風習なども記述されているが、そのひとつとして、カラジャン国の住民たちは、自分たちの家に泊まった立派な旅

人の魂を家に留め、あやかるためにその人を殺してしまったという。決して盗みのためではなかったというところが興味深いが、このような風習は南太平洋の島嶼にもマレピト思想としてみられ、たとえば満月の日にある島に上陸した人は食べられてしまうという。別にうまいまずいの問題ではなくて、自分より元気な人を食べれば自分も元気に、裕福な人を食べれば自分も裕福にあやかれるという一種の形態的アナロジーを基盤とした類感呪術的思想の現れであったと思われる。

**と** ところで、「日本書紀」の推古19年(611)5月5日に、大和の菟田野<sup>うたのやぐりょう</sup>において盛大な薬獵<sup>やくりょう</sup>が行われたという記録がある。薬獵というのは、恐らくは高句麗あたりから伝えられた国家的行事のひとつであって、時の朝廷に仕える文武

百官が綺羅をかざって列席する大掛かりなものであったらしい。目的としては軍事教練の意味があったともいわれるが、主な目的は不老長寿を願う天皇のために鹿を追い、猪を狩ることであった。若鹿の角、鹿茸<sup>ろくじょう</sup>は中国北部に生息するオオジカの生えたばかりの角で、そのエキスは不老長寿の靈薬、また猪突猛進のたとえのように元気な猪の肉はこれも体力増強に欠かせぬ貴重な蛋白源であったが、これにも、山野を駆け巡り躍動する若い鹿や、まっしぐらに駆け抜け



東京薬科大学 客員教授 山崎 幹夫

Mikio Yamazaki

る猪の勢いにあやかるための類感呪術的効能が期待されていなかったとはいえない。

形が人に似た人参や射干<sup>ひおうぎ</sup>、あるいはヨーロッパにおけるマンドラゴラ伝説にも、それに似た理由からの期待があったのではなかろうか。

**そ** もそも、人参や甘草をはじめとして、表面的には何も顕著な薬効を示すことがなく、「君薬に位し、毒性がなく、生命を養って氣を補い、いつまでも若々しく寿命を全とうする(不老長寿)」とされる120品目の薬種が『神農本草經』に上藥(上品)として収載されることになった所以は、考えてみると不思議である。

**ま** た、中国の民話にはこんな話がある。山で吹雪にあい、帰り道を見失った猟師の兄弟が、つる草の下にまるで人間のような形をした根を偶然にみつけて食べたところ、不思議な力を得た。そこで、兄弟はその根を少しずつ食べては体力をつけ、寒さをしのぎながら大きな木の幹にくりぬかれた洞にこもって冬をやり過ごし、やがて雪解けの春を迎えて村に戻った。元気な兄弟と再会し、彼らが持ち帰った根を見た村人は「まるで人間のようだ」とその形と効能を不思議がり、いつしか「人参」と呼んでこの植物の根を珍重するようになったという(『中国の民話』東京美術)。

**漢** 方における人参の重要性についてはいうまでもないだろう。たとえば『傷寒論』113処方のうち21処

方には人参が配合されている。

わが国では、天平勝宝8年(756)、聖武天皇崩御の七七忌に光明皇后によって東大寺廬舎那仏に献納された遺愛品(正倉院御物)に含まれる薬物中に人参が発見されている。「北122」の付箋がついたこの人参については、平成6~7年(1994~5)に行われた第二次正倉院薬物調査の際に、柴田承二教授らによって人参の成分であるギンセノサイドRX類の存在が検出され、正真の人参であることが証明された。当時、現実に使用されていた人参が世界最古の薬物として現在にまで残されていたことになる。

**人** 参の効能、適応、処方等については研究も進み、よく知られていて今さら詳しく述べるまでもないが、氣を補って疲労を回復する、血液の循環を改善して弱い血流を高める、精神状態を安定させる、口渴をいやす、呼吸を整える、胃腸を丈夫にし下痢を止め便秘をなおす、皮膚を潤し肌荒れを防ぐなど、高温多湿の日本の夏に生活し、食欲不振、

疲労倦怠などの症状を含むいわゆる夏ばてに悩むわれわれにとっては、補中益気湯や六君子湯、あるいは十全大補湯、清暑益気湯など、人参、甘草の他に朮、黃耆、陳皮、当帰などを適当に配合した処方が頼りになるだろう。

しかし、いかに君薬としての人参といえども、まったく副作用がないということはない。症状が合い、必要なときだけ、信頼のおける品質を選んでの正しい服用が大切であることはいうまでもない。

